6-6 経済的状態だけが原因なのではない

「2. われわれは経済的諸条件を、究極において歴史的発展を制約するものとみています。しかし人種は、それ自体一つの経済的要因です。だが、いまここで、二つの点が見落とされてはなりません。

a)政治的、法律的、哲学的、宗教的、文学的、芸術的、等々の発展は、経済的発展に立脚しています。しかしまた、それらはすべて反作用しあい、また経済的土台に反作用します。経済的状態だけが**原因**で、**これだけが能動的**であって、他のものはすべてその受動的な結果にすぎない、というのではありません。そうではなくて、**究極的には**つねに貫徹する経済的必然性という基礎の上で行なわれる相互作用なのです。……ですから、人々がときどき安易に考えようとするように経済的状態の自動的作用が行なわれるのではなくて、人間が彼らの歴史をみずから作るのですが、それは彼らを制約する所与の環境のなかで、既存の事実的諸関係の基礎のうえでなされるのであって、この諸関係のうちで経済的諸関係が、その他の政治的諸関係およびイデオロギー的諸関係によって影響されうるとはいえ、究極においては決定的な諸関係であり、ただひとつ理解に導く一貫した赤い糸なのです。

b)　人間は彼らの歴史をみずから作るのですが、しかしこれまでは、一つの総合計画に従って総意志をもってつくるのではなく、はっきりと区画された所与の一社会のなかでつくるのでさえありません。人間のもろもろの努力はたがいに交差しており、そして、すべてこのような社会では、まさにそれゆえに**必然性**が支配するのであり、この必然性の補完と現象形態が**偶然性**なのです。ここでいっさいの偶然性を通じてつらぬく必然性は、これまたけっきょくは経済的必然性です。」(**ボルギウスあてのエンゲルスの手紙1894.1.25)**
④-[50]P287上7～289の下線全部